

■■■ 作家楊逸(ヤンイー)が見る多文化共生社会～「『多文化共生』を考える研修会2010」から■■■

「『多文化共生』を考える研修会」が今年も灘区国際健康開発センターにて開かれました。KFCも主催団体の一つです。8月18日が初日で、以降最終の8月27日まで2、3日間隔で開かれます。

8月18日初日、満員の参加者に交じってKFCニュース係も出席してきましたので報告いたします。

初日の一こま目は、「芥川賞受賞作家楊逸が見る多文化共生社会」という講演です。講演者の楊逸さんは、1964年中国ハルビン市生まれ。23歳の時、留学生として初来日。お茶の水女子大学卒業後、在日中国人向けの新聞社で勤務。現在は関東学院大学客員教授、その他報道番組等でコメンテーターとしても活躍されています。

楊逸さんが中国で教育を受けていたころは、共産党が唯一正しく、資本主義は悪いものだと言われ、楊逸さんもそう思い込んでいました。その一方で、中国人全般は当時の日本の物質文明に憧れを持っていました。同時期の日本の農村部では嫁不足が顕著になっており、外国人でもいいからお嫁さんが欲しいと思う男性が多くいました。そういう状況を好機と見た人が集団お見合いを企画し、十分な恋愛期間を与えないまま、手早く紹介料を稼ぎ取っていました。当事者がよく検討しないで作り上げた結婚であったので結婚後に破綻に陥った事例が多く、お嫁に来日した中国人女性が嫁入り先から家出して東京へ逃げ出す例が多く、楊逸さんが勤務していた在日中国人向けの新聞社へ電話でSOS相談してくる人が多くいました。このような事情で来日した中国人女性の権利を守る法律は日本には存在しません。

今後の日本は、低賃金分野における人手不足状態が昂進していくと思われます。在留外国人も一層増加することでしょう。そういう中で上記のような中国人女性に遭ったら、皆さん、どうぞ優しく接してあげてください、と締めくくられた楊逸先生の言葉が印象に残りました。

(ニュース係 操田 誠)

◆改正入管法の概要と今後の外国人の受け入れ方針

「『多文化共生』を考える研修会2010」の8月18日の二こま目は、「改正入管法の概要と今後の外国人受け入れ方針」という講演で、講演者は佐藤修入管協会専務理事です。

2009年の通常国会において「出入国管理及び難民認定法及び日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法の一部を改正する等の法律」が可決・成立し、2009年7月15日に公布されました。

改正の概要はこれまで入管法に基づいて入国管理官署が行っていた情報の把握と、外国人登録法に基づいて市区町村が行っていた情報の把握を基本的にひとつにまとめて、法務大臣が在留管理に必要な情報を継続的に把握する制度構築を図ろうとするもの。対象となるのは、適法に日本に中長期間在留する外国人。具体的改正内容は次の10点です。

1 従来の「外国人登録制度」は廃止され、対象となる外国人に対し、上陸許可や在留資格の変更許可、在留期間の更新許可等の在留に係る許可に伴って「在留カード」が交付される。「在留カード」には、偽変造防止のため、氏名・生年月日等が記録されたICチップが搭載される。カード記載事項は、外国人登録証明書と比べて、大幅に削減される。例えば、所帯主、出生地、旅券番号や職業等は記載されない。有効期間は、16歳以上の永住者は7年間、永住者以外の方は在留期間の満了日までとなる。

- 2 特別永住者の方には特別永住者証明書が交付される。
- 3 研修・技能実習制度の見直し。研修生・技能実習生の保護の強化のため、在留資格「技能実習」が新たに設けられる。これにより、雇用契約に基づく技能等修得活動は、労働基準法、最低賃金法等の労働関係法令等が適用されることとなる。
- 4 在留資格「留学」と「就学」が「留学」に一本化される。
- 5 入国者収容所等視察委員会が設置される。
- 6 拷問等禁止条約等の送還禁止規定が明文化。
- 7 在留期間更新申請等をした方について在留期間の特例が設けられる。
- 8 上陸拒否の特例が設けられる。
- 9 乗員上陸の許可を受けた方は乗員手帳等の携帯・提示義務が生じる。
- 10 不法就労助長行為等に的確に対応するために退去強制事由等が設けられる。

講演の後半は、今後の外国人の受け入れ方針です。佐藤入管協会専務理事は、配布資料「第4次出入国管理基本計画の概要」を使って説明されました。今後の出入国管理行政の方針は次の4点。

- 1 我が国が活力を維持しつつ持続的に発展するとともに、アジア地域の活力を取り込んでいくとの観点から、積極的な外国人の受け入れ施策を推進していく。
- 2 テロリストや犯罪者の入国を阻止し、不法滞在者や偽装滞在者対策等を強化するとともに、法違反者の状況に配慮した適正な取り扱いを行っていく。
- 3 在留外国人の増加等に対応し、情報を活用した適正な在留管理を行っていくとともに、地方公共団体における円滑な行政サービスの実施に必要な情報の提供を行うなど、外国人の利便性の向上に努めていく。
- 4 国際社会の一員として、難民の適正かつ迅速な庇護を推進していく。

我が国の人口減少が本格化しつつある状況で、出生率の向上・生産性の向上・若者、女性や高齢者など潜在的な労働力の活用等の施策が必要ですが、他方で、これらの取り組みによっても対応が不十分な場合、それに対応する外国人の受け入れはどのようにあるべきか、我が国の産業、治安、労働市場への影響等国民生活全体に関する問題として、国民的コンセンサスを踏まえつつ、幅広く議論していく必要があります、と佐藤入管協会専務理事は締めくくられました。

(ニュース係 操田 誠)

#### ◆外国にルーツを持つ子どもへの教育

「『多文化共生』を考える研修会2010」の二日目が、[外国にルーツを持つ子どもへの教育]というテーマで8月20日に行われました。講師は、東京学芸大学国際教育センター准教授の菅原雅枝先生と神戸生田中学校の榎木一彦先生でした。

菅原先生は長年、日本語支援、学習支援に関わってこられて、今春から大学で研究指導をされています。支援者としての経験から「文化間を移動する子どもたちの学び」と題して講演されました。子どもは自分の意思ではなく周りの事情によって空間を移動し、移動することによって母語・母文化から切り離され、なじみのない言語・文化での生活を余儀なくされる。母国で積み上げてきたものが使えなくなってしまう。発達の途上にある子どもたちにとって学びを継続することが重要。そのために必要な支援はなにか。子どもに対する支援と同時に、保護者に対する支援も大切。学校の情報、生活に関する情報、その情報を入手するための支援が必要ということです。又、日本語を母語としない子どもが日本語で教科学習に参加していく力を育てるためのJSL（日本語を第二言語として学ぶ）カリキュラムの考え方についての話がありました。JSLの授業については、次に講演された榎木先生が神戸生田中JSL教室の実践を通して、その環境や実態について、又、取り組み方や今までの問題点などを説明されました。榎木先生は在外教育施設の口スア

ンゼルス補習校で三年間派遣教員として勤められ、お子さんを現地の学校へ通わされた経験をおもちです。七年前、神戸市のJSL教室の立ち上げから関わってこられて、現在、外国人生徒の取り出し授業をされています。日本語教員と、中学教員が情報交換をして、授業についていける力を養い、教科書が理解できる力をつけるために、子どもの年齢や多様性に応じた指導の仕方を工夫されているということでした。

両先生とも、学び成長する権利を持っている子どもの「過去」「現在」「将来」をつなぐ支援を！子どもたちがそのための支援を受けられる社会を考えましょう！と締めくくられました。

外国から来ている子どもたちをいかに日本好きにしていけるか、好きになってくれるような支援ができればいいですね。

(ニュース係 谷先 晴代)

---

## ■■■KFC日本語プロジェクト■■■

### ◆白熱した日本語ボランティア講座が終了！

5月15日から10回コースで「日本語ボランティア講座」を行い、17名の参加がありました。今回は例年になく少数精鋭で、模擬授業の教案も毎回提出するという課題も出され、「ボランティア実践法」担当の斉藤明子先生にも力を入れていただいたようです。最終日には受講者の方から先生にサンキューカードが渡されました。その仕切り役の山本雄洋さんが先生に宛てた感謝文の一部をこの紙面で紹介させてもらって、この白熱した講座の様子を汲み取っていただければと思います。

この度、先生がご指導くださいました8回の「日本語ボランティア講座(初心者コース)」は私達にとって、非常に有意義で有益なコースであったと誰もが確信しています。先生の永年にわたる知識と経験を教えていただくことで、多少の日本語ボランティア経験のある受講生にとっては、今までの実践方法の反省になり、改善への道が開けました。また、ボランティア経験のない受講生には、実践への明確な指針となりました。

加えて、受講者一同の「熱演」(注1)は貴重な体験で、お互いの「熱演」から色々学びました。私達にとっては、今までの「行き当たりばったり」のやり方でなく、学習者の環境を理解し、学習者のニーズを知り、それを満たす教案を作り、それを基に現実的な場面を創りだし、楽しい雰囲気の中で自然な会話を中心に、学習者と一緒に学ぶ事が必要だと痛感しました。私達にこれらの全てを達成出来るかどうかは疑問ですが、「千里の道も一歩より」で努力いたします。先生の、明るく前向きで寛容な人柄に感銘を受け、私たちは、これまでがんばってまいりました。ありがとうございました。

いつまでも、私たち受講生の師として、宜しくご指導のほど、お願いいたします。

※注1・・・グループごとに先生役と学習者役に分かれ発表した模擬授業のこと

### ◆中・上級レベルの指導に必要なこと～日本語学習支援アドバイザー派遣事業

9月5日(日)、シューズプラザ4階会議室で主題の講演がありました。講師は兵庫県国際交流協会登録日本語教師、瀬古悦世先生です。出席したニュース係がレポートします。なお、同一内容の講演が9月8日(水)にKFC事務所で行われる予定です。

ざっくり言うと、テキスト「みんなの日本語 初級Ⅰ、Ⅱ」を終えた人を中級の学習者と呼ぶ。そういう学習者とは再度面談して、学習の目的を再確認し、その目的に沿った中級用テキストを選

ぶ。中級学習者には、「読解」および「書き取り」能力の向上が重点課題となる。また、学習方法としては復習より予習に力が注がなければならない。中級学習者を例えると広い海にこぎ出した手漕ぎのボートの乗員であり、目標をしっかりと目にはすることは難しい。学習目標は語彙何千語という数字ではなく、それを使ってなされる言語能力の習得である。中・上級は、進歩の実感が得られにくい時期である。

中・上級での漢字の指導は学習者の学習目的によっては読める漢字と書ける漢字の2種類に分類して指導するのが賢明。覚えさせるためには宿題を多用するべし。聴解指導においては初級での「一問一答」形式を「まとまった話を聞いてから解答」形式に移行するべし。読解指導においては、日本語能力試験を受験する予定の学習者はもちろん、そうでない学習者にも、実生活において必要となる「速読」の方法を指導する必要がある。

新しい「日本語能力試験」の改定ポイントは、4つある。①語彙・文法を実際のコミュニケーションでどのくらい使えるかが出題されるようになる。②レベルが4段階から5段階に増える。③得点等化が行われることになり、異なる時期に実施された試験の得点を相互に比較ができるようになる。④「日本語能力試験Can-doリスト」が提供されるようになり、日本語教育部外者でも受験生の能力判定ができるようになる。

模擬試験問題集や過去の問題集を教材にするという考え方もあるが、中・上級学習者を支援するボランティア支援者にとっては難しい。範囲が多岐にわたるからだ。文法・漢字・読解それぞれに分かれて問題集がいろいろ市販されているので、それらの中からテキストを選ぶのが賢明。

現役の日本語教師でもある講演者が最も重要だと指摘されたのは、「学習者の学習動機を維持するのが中・上級支援者の役割だ」という言葉でした。身近な小さい学習目標を設定させることに支援者が力を注ぐことが、中・上級支援者に求められているのです。（ニュース係 操田 誠）

## ■■■ K F C 外国にルーツを持つ子どもの学習支援 ■■■

### ◆夏休みの工作を作ろう！～プラネタリウム

7月28日（水）に、多文化子どもセンターにて、夏休みの工作づくりが行われました。小学校低学年の子どもたちから中学生まで、多くの子どもたちが参加してくれました。各自思い思いのプラネタリウムを作成し、その後、手作りのお菓子をみんなで頬張り、楽しいひと時となりました。完成したプラネタリウムは、暗闇で点灯すると、まるで星空の下にいるかのようなすばらしい空間を演出していました。子どもたちからは、点灯と同時に「おー、綺麗！」などの声が次々と発せられ、センター中に響きわたっていました。

当日は、支援者の方々も参加してくださり、子どもたちとともにプラネタリウムづくりに苦戦する姿（私も含めて）が非常に印象的でした。普段は学習支援という少しシビア？な関係の中でコミュニケーションをしている支援者と子どもたちですが、工作という場においては、むしろ子どもたちから支援者が「教えられる」ことも多々あったようで、普段とは少し違ったコミュニケーションをすることができたのではないのでしょうか。とくに今回の工作は難しく（ご迷惑をおかけいたしました）、子どもによっては言語の壁をより痛感するような状況であったにもかかわらず、ジュスチャーを交え、失敗をともに悔しがり、完成をともに喜びあっている姿を見ると、プラネタリウムで演出した空間と同じくらい素敵な場所だなと心の底から感じることができました。今後もこのような活動にたくさんの子どもたちや支援者の方々が参加してくださることを願っています。

最後に、プラネタリウムという「コスト」のかかる工作を提案したにもかかわらず、ありとあらゆる要望に迅速に対応してくださった支援者の方々、そして何より、難しい工作に一生懸命取り組んでくれた子どもたちに感謝します。お疲れさまでした。（芝野 淳一）

## ◆インターン紹介

私は外国にルーツをもつ子どもたちが将来の夢や希望にむかってまっすぐ進んでいけるようにするお手伝いをしたいと思い、KFCをインターンシップ先に志望しました。実際のインターン期間中には、定住外国人子ども奨学金と学習支援の仕事のお手伝いをさせていただきました。奨学金事業では、事業を継続することの難しさ、さまざまな部署と繋がりを保っておくことの大切さなどを学ぶことができました。また学習支援では、子どもたちに勉強を教えることの難しさやわかってくれたときの喜びなどを感じることができました。

私がインターン期間中一番強く感じたことは、直接ふれあうことが大切だということです。私自身外国にルーツを持つ人とふれあう機会は普段あまり多くありませんが、直接ふれあうことで無知の無をとり、相手の魅力を発見することができるのではないかと感じました。

私たちが暮らし社会には様々な国籍、文化、宗教を持つ人たちが暮らしていると思いますが、どうせ同じ社会に生きるなら、直接ふれあうことで異なることが魅力になるような社会になればいいのになあと今回のインターンを通して思いました。

(神戸学院大学 赤嶺 佑一)

今回神戸定住外国人支援センター（KFC）にインターンとして参加させてもらいました。初めはとても緊張していましたが、皆さんとても優しくて分からない事など丁寧に教えてもらい緊張がほぐれました。

主に事務作業と子どもの学習支援に参加させてもらいました。事務作業ではパソコンでチラシを作ったり、データを打ち込んだり、アンケートをまとめたり、さまざまな作業を教えて頂きました。子どもの学習支援では子どもに勉強を教えるということが初めてだったので戸惑いましたが、一緒に考えたり、分からない所を教えたりするのはとても楽しかったです。教えた問題に対して理解して自分自身の力で問題を解いてくれた時や問題を解いた子どもが笑顔になった時は本当に嬉しい気持ちになりました。

子どもたちから元気を分けてもらい残りのインターンも頑張っていこうと思います。

(甲南女子大学多文化コミュニケーション学科2回生 谷本 愛実)

私がKFCでインターンシップとして活動をさせて頂くようになってから、もうすぐ2ヶ月となります。とは言っても時間に換算するととても短いものですが、事務作業やお掃除など表からはあまり分からないお仕事から、外国にルーツをもつ子どもの学習支援をさせて頂いています。

私はもともと子どもが好きだったのでとても楽しみにしていた反面、「教える」ということにとても緊張しました。ふだん日本語でしか話をしていないですが、日本語を誰かに伝えたり、教えたりすることを今までしたこともなく、どうしたらいいのかとても不安と緊張がありました。実際に子どもと触れ合いながら初めて日本語の教科書を見てまず驚き、子どもからの質問で「四季」の意味やいつをさす言葉なのかの説明をどうしたら伝えられるのかなど手探りでの学習支援活動となってしまいました。しかし、子どもたちみんな笑顔で必死に理解しようと、勉強しようとしてくれてすごく「教える」ことが楽しいと思えるようになってきました。ここで会ったばかりの私に優しくしてくれる子どもにこれからも少しでも学習支援のお手伝いができたらと思います。

(甲南女子大学 多文化コミュニケーション学科 山村 まどか)

## ◆就学支援ガイダンス

兵庫県教育委員会主催の「外国から来た子どもたちへの就学支援ガイダンス」に、KFCで学習している高校1年生のグエン フウ ホアン君と一緒に参加してきました。

開会のあいさつの後、教育委員会の方から就学及び高校入試に関する全体説明があり、その後、先輩からの体験談ということで、ホアン君が発表を行いました。日本に来てから不安だったこと、学校で苦労したこと、将来の夢、そして、後輩のみなさんへのメッセージを、約10分間、堂々と発表しました。

その後、言語別の教育相談があり、私とホアン君もベトナム人の子ども2名の相談に入りましたが、その子どもたちの相談内容を聞いて感じたことは、子どもたちの置かれている状況が、KFCで子ども支援を本格的に始めた5年前とほとんど変わっていないということです。学校の先生に話をするのが難しいのか、子どもの成績や受験できる高校の情報などを一番把握していらっしゃる学校の先生に相談できなかつたり、渡日して数年で日本語がまだ十分ではなく経済的に余裕のない子どもは公立高校に進学するのが難しく、高校進学の大きな壁になっている状況等です。後者の問題に関しては、他府県で実施されている高校特別入学枠（基準に違いはあるが、18都道府県で実施）の実施で一定進学が保障されるので、早期に実施して欲しいと思います。教育委員会の方も本制度についてはよくご存知で、質疑応答の時にも「他府県では実施されているが、当県にはその制度がない」とおっしゃられていました。子どもや保護者の立場に立って、他府県の例を参考にして、教育制度改革に恐れず取り組んでほしいと強く感じました。

(志岐 良子)

---

## ■■■ ハナの会 ■■■

### ◆夏まつり開催

8月10日(火)、8月11日(水)の二日間、ハナの会では例年通りに夏まつりを行いました。二日共に20余名のオモニたちが集まり、にぎやかで楽しい一日を過ごされました。

今日はいつもより多くオモニたちが来ています。久しぶりに会う人、初めて会う人もいました。パングアムにダ (嬉しいです)

午前中は、金魚すくい、ヨーヨーつり。オモニたちは、嬉しそうに夢中になって、「あ～、やぶれてしまうたわ。でも、ぎょうさんすくたわ。楽しかったわ。ハハハ、、」「ヨーヨーもなかなか切れへんな。」と、次から次と、赤、青、ピンク、最後に一個、孫のおみやげにもらって行きます。(誰にも見せない笑顔です。お手玉投げは、なかなか点数の高い所には入りにくい。

「入れ！」と、かけ声だけは大きく力が入ります。

昼食は、バイキング方式。コサリ(ぜんまい)、シグムチ(ほうれん草)、ム(大根)、コンナムル(豆もやし)のナムル、チョレギ(和えもの)、から揚げ、チャプチェ、シリット(餅)、オモニたちが好きな物ばかりです。

食事の後は、いよいよ本番です。オモニたちもチョゴリに着替えます。きれいです。一番に、朴承花氏のフンチュム(舞踊)です。オモニたち、うっとりです。KFC事務スタッフの歌、キャストアップ有志のサムルノリ(伝統楽器演奏)、カクソリタリョン(「乞食」の踊り)今年、イケメンの中国内モンゴル出身のフフ君の参加で、最高に盛り上がりました。

笑い声が止まりません。出来れば、チャングの響きに合わせて歌って踊るハルモニたちの楽しそうな姿を、家族の方達にも見て欲しいなと思いました。スタッフの方、お疲れ様でした。カム

サハムニダ。

(ボランティア 朴英子 (パク・ヨンジャ) )

(※8月10日(火)にお手伝いいただきました。ハナの会開設当初より毎週木曜日、オモニたちを暖かく見守って下さるボランティアさんです)

次の日の8月11日(水)では、午後の演目に、6月から加わった新しい男性スタッフの呉洪錫(オ・ホンソク)の「コッタリョン(花を売る娘)」。チマチョゴリを着て、短い髪を結んで化粧もバッチリ!「コッサシヨ〜(花買って〜)」と、華麗(?)に踊りながら手に提げた籠から、スタッフ手作りの花をオモニたちに優しく撒いて歩く姿に、オモニ、アボジ達は大笑!もらった花を大事そうに手に包んでいらっしゃいました。

今回はサムルノリのために、3か月前からスタッフが練習して準備しましたが、オモニ、アボジたちが笑顔で喜んでくださるのを思い浮かべながらの楽しい時間でした。

二日間、見守りや厨房のお手伝いをして下さったボランティアの皆さまに、この場をお借りしまして心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。カムサハムニダ。

来年もまた、利用者の皆さまに喜んでいただけるように、頑張っていきます! (ハナの会スタッフ一同)

---

### ■■■ 今後の予定 ■■■

#### ■ 研修会

10月9日(土) 13:30~15:00

「ベトナムの歴史と現在」 中村通宏(KFC副理事長、日本ベトナム友好協会)

於 多文化子ども共育センター(moi)

11月13日(土) 13:30~15:00

「音楽ワークショップ」

於 多文化子ども共育センター(moi)

#### ■ ハナの会の敬老の日

9月21日(火)、22(水)

#### ■ 仕事探しに役立つ外国人のためのパソコン講座

9月12日(日)~10月3日(日)

#### ■ 防災学習・水餃子パーティ・卓球大会

10月17日(日) 9:00~16:00

於 人と防災未来センター&多文化子ども共育センター(moi)

#### ■ 韓国スタディツアー

10月17日(日)~10月20日(水)

#### ■ 外国人のための就職支援講座

10月2日(土) 13:00~16:00 於 兵庫県国際交流協会